

第2回ユネスコスクール神奈川県大会 報告

日本／ユネスコ・パートナーシップ事業

日 時：平成 28 年 8 月 27 日（土）9:30～18:00

会 場：横浜シュタイナー学園

主 催：神奈川県ユネスコスクール連絡協議会

実行委員長 住田昌治（横浜市立永田台小学校長）

共 催：東海大学教養学部（ASPUnivNet）

後 援：神奈川県教育委員会／横浜市教育委員会／日本ユネスコ協会連盟／

ユネスコ・アジア文化センター／神奈川県ユネスコ協会連絡協議会

参加者：84 名

（ASPNet：43 名、一般校：14 名、UNESCO 関係者：7 名、行政：3 名、大学：11 名、市民 6 名）

【第一部】

横山義宏（ホスト校担当教員）の挨拶、住田昌治（実行委員長）挨拶の後、韓朱仙（ホスト校教員）によるアイスブレイクプログラム「質問ビンゴ」で会場の緊張が一気にほぐれた（写真）。見事ビンゴを当てた 1 名には韓国のりがプレゼントされた。うち解けた雰囲気の中、ゲスト講師のマーティン・ローソン氏によるキースピーチが行われた。マーティン氏はシュタイナー教育実践研究者としての背景を有している。なお、総合司会は所澤新一郎（ホスト校保護者）が担当した。



〈キースピーチ〉「子どもの内的発展に即した ESD 実践の可能性」

マーティン・ローソン（ドイツ・キール教員養成所責任者）

通訳 内村真澄（横浜シュタイナー学園英語専科教員）



○1994年にスイスのジュネーブで開催された第44回ユネスコ国際教育会議にシュタイナー教育関係者が招かれ、国際的な教育展が世界中を巡回した（日本も）。その公式パンフレットの解説執筆者のひとりとして関わったことを通じて、ユネスコの仕事に関わるようになった。コソボ内戦の復興プロジェクトにも関わり、トラウマを抱えた女性たちの自立を支援し、彼女たち自身が大学の教員となって平和教育に取り組む後進を育てるまでの成果を上げている。

○今回のテーマ「子どもの内的発展に即した ESD 実践」

について、シュタイナー教育の観点からお話ししたい。シュタイナー教育では、人間の総合的な成長と学びの契機や環境を子どもたちに提供することがその柱となる。学びは複雑な過程をたどるものだが、それを持続可能な変化と行うことができる。知識だけでなく、身体および全感覚を通じた世界との関わりがどのように変化していくのか。環境や他者との関係の変化。そのような変化の積み重ねの先に自分の行動による世界の変化がある。それは、ポジティブな意味で持続可能な社会に貢献できるような教育を提供することに他ならない。

○アマルティア・センがケイパビリティという概念で示した子どもたちの社会的能力（判断力、共感、世界市民感覚、エコロジー）は誰もが賛同するものだが、この20年でそれを実現することがますます難しくなっている。各国政府は確かにESDを支持し署名しているかもしれないが、多くの国で教育政策にOECDなどの経済的機関がつくった教育指針が採り入れられている。そこから評価主義的なあり方や教育を標準化することによる弊害が広がっている。教育とは本来、あらかじめ定められた成果を目指すものでもなく、標準化できるものでもなく、自律的で創造的な複雑系であり、オープンエンドな営みであるはずのもの。

○このような課題に対して、シュタイナー教育の場合は次のようなアプローチをとっている。子どもたちが生き生きと楽しく体験する。ある事柄がどのように体験されるかは年齢によって変わってくる。

○1年生では先生からお話を聞き、絵を描く。お話と絵は世界をひとつのまとまりある統一体として体験させてくれる。昼と夜、太陽と月のような二極性など、世界の根源的な要素をイメージの中に含んでいる。そのようなお話を受け取り、一晩寝かせた後、子どもたちはお話を思い出して語り合う。そこで子どもたちは、ひとつのお話がそれぞれのなかで異なる体験となったことに気づき、多角的な視野を得ることができる。学んだことを忘れるというプロセスが大切。

○3年生になると、クラス全員で農場に出かけていく。そこで出会うお百姓さんから、子どもたちは先生とはまったく違う印象を受け取る。馬が引く鋤を、子どもたち何人なら引くことができるかやってみる。帰りには泥だらけだが、子どもたちは幸せ。ここでも、一晩体験を寝かせた後、ふたたび体験を語る。トラクターに興味をもった子どももいれば、馬に惹かれた子どももいる。そうした多面的な子どもたちの会話を通して、教員は物事の本質へと子どもたちを導いていく。

○9年生になると、お話や絵の世界から抜け出す。子どもたちだけで3週間の農場実習を行う。「自分たちだけで大丈夫だから！」と両親に告げてやってきたものの、蜘蛛の巣だらけの宿舎や早朝から続く労働に音を上げる子も出てくる。最初の1週間は、就寝前に1日の仕事の内容を書き留める。これを後で読み返すことは、農場の仕事の多様性に気づき、その多様な仕事を自分が成し遂げた充実感を味わう重要な学びとなる。朝のお茶のわずかな時間の重要さに気づく。2週間目からは、農場の経済がどのように回っているのかを調べる。どれほどのエネルギーを使うのか、トラクターの値段はどれくらいか。そのお金をどのように調達するのか。1リットルの牛乳から、10キログラムの野菜から、どれだけの利益が上がるのか。子どもたちはエンジンを洗いながら、何本エンジンを洗ったらあのトラクターが買えるのかを考える。3週間後、学校に戻り、両親の前でプレゼンをする子どもたちの立ち姿は明らかに変化している。豆だらけの手を誇らしげに示しながら、自分の農場のこのように話をする。

3週間の間に子どもたちは自分のアイデンティティを変化させた。プレゼン時の情熱はやがて冷めていっても、彼らのなかに生まれた農業への尊敬の念や、食肉への意識の変化は一生のものとなる。

○次の年、子どもたちはもっと産業よりの職業分野を3週間で体験する。工場、建築事務所、港湾施設、

空港など。自分のレポートを書き上げた彼らは、異なる分野で実習した他のクラスメイトの体験にも関心をもつ。そして、長い時間をかけて体験を消化していく。

○このように、シュタイナー教育では、ひとつの領域を3~4週間集中的に体験するカリキュラムが基本となっている。解剖学を4週間。幾何学を3週間。それぞれの課題の終了後、子どもたちはその領域についての小さなエキスパートになっている。しかしすぐに別の領域の学びに子どもたちは没入し、それまでの学びは忘れる。「それで大丈夫なのか」と問われれば、「それが学習の重要な要素なんだ」と答える。数ヶ月して、ふたたび同じ領域の学びに取り組むとき、子どもたちは



いったん忘れた「体験」の数々に再びつながりを見いだす。思い出すというプロセスの中で、以前の体験が自分を変化させたことを子どもたちは体験する。喜びと熱意をともなう集中的な時間が自分を変化させたのだと。そこで想起されるものは、ただの知識や事実の思い出ではない。生徒の中に保たれているものは、変化した在り様というべきもの。

○そのような変化は、いままでとは違った考え方や感じ方をもたらす。いままで出会ったことのない状況に適切に対応できる柔軟性と幅のひろさをもたらす。それは知識だけの変化では得られないもの。忘れては思い出すという繰り返しが人を強め、そこから生きる上で役立つ習慣が生まれてくる。人の話に耳を傾ける習慣、秩序立てて体験を思い起こす習慣。

○さらにその先に、ひとつの体験とその他のいろいろな体験を比較し、関連づけるという段階がある。そうやって初めて、私たちは特定の概念を説明することができる。体験を濃縮して、それらを体系づける作業に取り組むことができる。新しい概念、ルール、法則はこうして生み出される。

○これを何度も繰り返していくことが、新しい何かを創造する能力となる。何かを学び、思い起こし、専門家たちの仕事からその領域の理解を深めていく。さらに基本的なスキルを身につけ、専門家から指導を受け、異分野の専門家からも学びながら、最終的に自分自身から何かを生み出せるようになる。

○このような例で示した学びのゴールは、「学ぶことを学ぶ」という地点。ひとつひとつの教科というものは、それぞれが違った角度で世界に開かれた窓のようなもの。美術、数学、化学、文学、それぞれの教科から、子どもたちは違った世界の見方を学ぶ。職業体験もそう。そのような学びを通して、子どもたちはやがて、世界のなかで自分にできること、自分自身の使命とは何かを考えるようになる。この時期になれば卒業は間近。

○低学年の子ども、中学年の子ども、思春期前、思春期後と、彼らは世界の見方をどんどん変容させていきながら、世界の中で生きることを学んでいる。

【質疑応答】

(Q) お話からとても刺激を受けました。劣等感を感じている生徒がいたとしたら、教師としてどのように対応しますか。

(A) 短い時間では表面的なお答えになりますが、まず、それぞれの子どもが「自分は先生に話を聞いても

らえているな」「わかってもらえているな」と感じられるようにすることが教師の重要な仕事。もうひとつは、教室のなかに競争原理を持ち込む代わりに協調を促すことを基本に置くことが大切。競争で全員が勝者になることは出来ないのだから。ただし、自分に勝つのはOK。この課題を自分は前よりも上手にできるか。教員の評価の役割は、その子が前よりもよくなったことに焦点を当てることであり、他の子と比べることではない。ニュージーランドの研究者ジョン・ハッティは、その研究のなかで、子どもの学びがもっとも促進されるのは、教師が子どもたちの状態を見て、自分自身の教育的振る舞いについて自己判断を下す場合であることを示している。自己変容こそが教育者の課題であり、教員グループ全体で取り組むことが大切。

【第二部】

〈パネルトーク〉「地域資源とネットワークで育てる ESD」

パネラー	吉武美保子（横浜市にいほる里山交流センター職員） 小正和彦（横浜市立幸ヶ谷小学校校長） 広木敬子（横浜市立永田台小学校教務主任） 小林裕子（横浜シュタイナー学園教員）
進行	佐藤雅史（横浜シュタイナー学園事務局長）

第一部の内容を受けつつ、そこで示された体験循環型 ESD を実践していくための地域環境に目を転じた。横浜北部随一の里山を背景にした横浜シュタイナー学園、都心部の臨海地域に位置する横浜市立幸ヶ谷小学校、高齢化が進む団地のなかに立地する横浜市立永田台小学校の先生方、そして地域の環境資源と学びを仲介する NPO 職員にお話を伺った。

○吉武美保子氏（横浜市にいほる里山交流センター職員）

横浜市北部に広がる新治市民の森ビジターセンターとして人と里山をつなぐ役割を果たしている。里山公園と言っても地域のなかのハブ機能をもっており、いろいろなニーズを聞いて、「これはこうやるともっといい体験ができますよ」とか「こういう使い方はちょっと。ごめんなさい」という調整の役割を提供している。

○小林裕子氏（横浜シュタイナー学園教員）

その里山を大切にに使わせてもらっている（横浜シュタイナー学園資料 P.14-15）。低学年では森のなかで空気を感じ取ったり、音楽の時間で木の音をきいたりして、感覚を使うことを大切にしている。学園では3年生の時期に家をつくったり、田んぼをやったり、畑を耕したり、職人さんと呼んだりして、成長の節目にふさわしい体験を重ねている。

○小正和彦氏（横浜市立幸ヶ谷小学校校長）

横浜市の中期学校経営方針の中心に ESD を置いている（幸ヶ谷小資料—1）。自分の成長と社会との関



係のなかで社会も変えていく取り組みを行っている。総合的な学習の時間と教科をあわせた「横浜の時間」を使い、すべてのクラスが別々の内容に取り組んでいる（資料―2）。それを冊子にし、それぞれESDのどの視点を大切にした活動かを明示している。また、地域と一緒にESDを進めることを目的としてコミュニティスクールになった（資料―3）。資料―4は4年生の取り組み「未来に残そう生き物たくさん幸ヶ谷の海ガイドブック」。レイアウトはプロにお願いしたが、素材はすべて子どもたちが用意。ミッションをもって体験することが大切だと考える。都市部の海にも豊かな生物がいることを知り、そのような環これからの持続可能なまちづくりに関わっていく取り組みをしている。

○広木敬子氏（横浜市立永田台小学校教務主任）

大きな団地のなかにある学校。学校だけではなくて地域のサスティナブルマップもつくろうとした折、地域にまちづくり委員会ができ、高齢化でシャッター街になった商店街を拠点に活動が始まった（永田台小資料）。そこに参加すればマップの材料になると考えた。最初はシャッターを開けるだけだったが、地域の子どもたちも集まってきたら、話し合いの雰囲気がからっと変わった。イベントのアイデアが出され、運営委員会がスタートして、学校にはイベントの命名とポスター（のぼり）づくりをお願いしたいと。ハーモニカサークル、昔遊び、私たちもちょっとした演奏を行った。この活動がうまくいっているのは、2ヶ月に1度程度のペースで、わたしたち学校も不自由していないし、街の皆さんもできるだけ楽にやりましょうというスタンスがあるからだと思う。

街の高齢化は全国的な共通課題。会場の参加者のおひとりからは、「子どもと活動すると大人も変わるのだから、日中も街にいるお年寄りと一緒にできる活動を柔らかい発想と遊び心で生みだし、学校の中だけでなく街のなかで一緒にできることをともに考えてほしい」という発言もいただいた。そのような地域との連携を、コミュニティスクールという制度を使って行っているのが横浜市立幸ヶ谷小学校。

○小正

自分のなかのイメージは英国などにあるコミュニティスクール。昼間は学校だが、市民教育・社会教育にも使っていて、夕方には併設のパブで酒を飲める。日本の公教育のなかでは難しいが。

幸ヶ谷小の7割から8割は周辺のマンションに移ってきた家庭で、地域とのつながりも薄く各家庭の価値観も多様。そういう人たちが一緒に子どもを育てていく関係をつくるには何が必要かと考え、共通の目標としてESDを持ち込んだ。持続可能なまちを目指して子どもたちがまちのために活動をし、いろいろな人から評価され、その繰り返しにより、どんどん変容していく。コミュニティスクールの取り組みでは、月に1回、日中に老人会の会合を多目的室でやっている。どこかのクラスが関わるかなと思っていたら、案の定、関わり始めた。地域に開かれたというだけでなく、社会に開かれた、すなわち社会の多様なリソースと協働した学校をつくるという意味で、コミュニティスクールを活用している。

ユネスコスクール、コミュニティスクールなど、制度の特徴を上手に組み合わせ、明確なビジョンをもって地域連携の取り組みをつくっている好事例を見せていただいた。参加校の横浜市立三保小学校からも、同様の取り組みについてご報告いただいた。一方で、制度とは別に、地域の連携を媒介する中間支援組織の存在もまた、地域連携の重要な推進力となる。そのような活動として「にいほる里山交流センター」の活動報告に耳を傾けた。

○吉武

戦略的な考えがあった。「新治里山ごよみ」を早い段階からつくって、近隣の学校に配ってきた。何もない、マイナスのイメージしかない場所を、「ここって何だろう、面白そうだね」に変える。来てもらい、知って、気づいてもらい、何かを経験してもらうことで、ここをどう利用しようかというところにつながる。新治小や三保小が面白いことやっているということが広がって、ようやく他の学校の先生方も気づいてくださったところだ。

横浜シュタイナー学園の3年生が竹で家をつくったというお話があったが、昔から日本人にとって身近な竹がいろいろな学年の体験の軸になっている。3年生ではとにかく竹を切ってきて交差させて組む体験。森の手入れをしている新治市民の森愛護会のおじさまたちがお手伝いした。一方、9年生の竹細工では、非常に細かい作業に取り組む。竹細工の先生とボランティアさんで竹ひごをつくる時、表面の皮の薄いところだけにしないと、編むことができない。先生方が何を子どもたちに学んでほしいのかをよく聞いた上で、その作業工程をどうデザインするかをものすごく考える。学校の先生が突然地域のなかでポンと行っても、たぶんうまくいかない。どこか自治会なり地元の方なりのなかでのコーディネート機能が間を仲介しないと、こういった包括的な学びはかなり難しいだろうと思う。

最後に、教育のなかで地域とつながることの要点について、各発言者に思い浮かんだ言葉を残していただいた。

○広木

変わるということ。地域と関わる仕事は、はじめはたいへんな仕事だろうなと思っていたが、じつはとても楽しい仕事だった。地域のなかから見えてくるものも多く、そこから自分が変わっていった。「あの人に相談したらいいよ」「ここはこうなっているよ」とか、そういう関わりが面白い。それが学びだと思うし、子どもにとってのそういう瞬間もみつけてあげられるようになる。

○小正

今日のマーティンさんのお話にもあったが、これから必要な力として他の立場を理解する能力があると思う。本当に持続可能な社会、持続可能な世界をつくるために、さまざまな多様性を認め合うことが前提であり、最終的にはグローバルシチズンシップの視点に入っていくべき。その最初の入り口が地域である。

○小林

ともに生きるということ、共生ということだと思う。地域にはいろいろな人たちがいて、そういう人間関係の豊かさを体験しながら、子どもたちが地域の方たちとともに生きていけることが大事なことだと思う。

○吉武

マーティンさんのお話を聞いて頷いたのは、規格化の方向はあまり持続的でないと。多様性と変化ということが持続可能につながるのだと。たとえば私たちの身体は何年かのサイクルで細胞がすべて入れ替わる。だけど私たちの外見は変わっていない。そこには大きな変化があるのだけれど、本質は維持される。それが持続的ということなのかと思う。

【第三部】

〈全員参加ワークショップ〉「もしも世界が 100 人の村だったら？」

進行 韓朱仙（横浜シュタイナー学園教員）

子どもの内的発達と ESD、地域とのつながりというテーマで「アクト・ローカル」な視点から学びを深めた後、今度は「シンク・グローバル」な視点での DEAR 教材の全員参加型ワークショップに取り組んだ。70 名近い人数でのダイナミックなワークショップは圧倒的な体験。世界のなかの文化的マジョリティとマイノリティの成りきり体験を経て、最後は世界の富の偏在を手にしたビスケットの数でしみじみ実感するフィール・グローバルな体験となった。以下に参加者の感想を引用する。



○「オラ！」と声をかけたら返事が返って来たときの喜び。やっぱり母語が通じる安心と通じない不安って大きいと実感した。ココナッツサブレはもらわなくても良かったのかもしれない。それは、それで分け合えたとし、満たされたのかもしれない。何か後ろめたい味がした。

○頭ではなく体で「世界の多様性」を感じられたことが良かったです。住む場所、言葉、そして経済格差。一番印象的だったのはココナッツサブレを分け合った時、他を知らなければ少量でも満足できるのにも思ったことです。しかし、知ることなしに一步は踏み出せない。韓さんから、これまでのご経験がにじみ出ていたのが良かったです。

○ビスケットを貧富の差で分けると、2人しかいない日本人が裕福な方に入っている。たくさん食べられるから調味料にまでこだわるのだと気付いた。また、当たり前のようにになっている消費社会を見直していくことが必要だと感じた。

○アジア人が多いことや得られる食糧の割合など、知識としてはわかっていたことでも、実際に「こういうことなんだ」ということが視覚的にわかるとやはり考えさせられる。また、最も貧しい層のグループであったが、求めているのにクッキーを渡され何とも言えない空気が生まれた。「支援」も少し間違えると同じような状況を生みかねないと感じた。

この後、ユネスコスクール神奈川県連絡協議会を支援してくださってきた神奈川県立有馬高校の実践報告があり、クロージングでは、玉川大学教育学部(ASPUnivNet)の小林亮先生、東海大学教養学部(ASPUnivNet)の小貫大輔先生、聖心女子大学の永田佳之先生、ローソン夫妻による総評をいただき、全プログラムを終了した。

(まとめ文責：佐藤雅史)